

## 「30年後の植物科学」改め「30年後に知る、さらに100年後の植物科学」

「グリーンマン (下)」 長谷部光泰

ソコトラ島で、昔は紛争があったとは思えない景観の中、想像を絶するドラセナ ドラコの偉容に圧倒され、帰りがけには対岸のソマリアでディラクマ科のディラクマ ソマレンシスの花を見ることができなんととも愉快的な調査だった。

これも、あのグリーンマンのおかげだ。極地地方で進化した新グリーンマンは、光合成効率が飛躍的に高く、1日1分の太陽光で十分なエネルギーを得られることがわかり、その遺伝子はすぐに地球全体に広がった。その結果、世界中のグリーンマンたちは光を求めて争うことが無くなり、戦争という言葉は死語となった。さらに、自らの体への興味から、全員が植物に興味を持ち、自らの分身のような植物をペットとしてかわいがるようになったのだ。

帰国して味噌汁をすすりながらテレビをつけるとアナウンサーの「今年もスギの雄性孢子嚢穂から花粉が出る季節になりました」と言う声が聞こえてきた。昔は、被子植物を中心にわけのわからない教え方をしていたために、「スギの花」なんて言っていた時代もあったと昔の本で読んだことがある。被子植物が2枚の珠皮を持つ理由が解明され、裸子植物の1枚の珠皮と対比させることは小学生でも常識になった。そして、陸上植物全体を体系的に教えることが容易くなった。そういえば、先日、学生に、「昔は農水省のホームページにギンナンの「外種皮」が臭いなどと書いてあったそうだよ」と言ったのだが、だれも信じてくれなかった。被子植物は2枚の珠皮があるので内種皮と外種皮を持つが、裸子植物は1枚なので種皮は1枚で外も内も無いということが専門家でもわからなかった時代があったのである。こんなに植物研究が進んだのも地球人のすべてがグリーンマンと交雑して植物に興味を持つようになったからだろう。もちろん、埋め込み型コンピューターが誕生し、無限に記憶できるようになったおかげでもある。

さて、そろそろ来週のギアナ高地行きの準備をはじめよう。ベネズエラが破綻してから、ずいぶん長い間、人が近づくことのできなかった山々である。ついでに、世界一裕福で治安が良いと言われているコロンビアでアンデスの山々も歩けそうだ。グリーンマン遺伝子のおかげで、食料もいらぬし、疲れもしないので、麓の熱帯林から歩いて登るとするか。